

琉球王国の陵墓制 中山王陵の構造的特質と思想

著者	安里 進
雑誌名	周縁の文化交渉学シリーズ3 『陵墓からみた東アジア諸国の位相 朝鮮王陵とその周縁』
ページ	195-213
発行年	2011-12-31
その他のタイトル	The Royal Mausoleum System of the Ryukyu Kingdom Constructive characteristics and the concept of the Chyuzan Mausoleum
URL	http://hdl.handle.net/10112/5908

琉球王国の陵墓制

— 中山王陵の構造的特質と思想 —

安 里 進

The Royal Mausoleum System of the Ryukyu Kingdom
Constructive characteristics and the concept of the Chyuzan Mausoleum

ASATO Susumu

琉球王国（中山）では、13～19世紀の600年余に4王統が交代した。14～15世紀には、沖縄島の北と南に山北・山南という小王国も存在した。これらの王統に関係する王陵が7基存在する。私の報告では、初期の中山王陵・浦添ようどれ（1273年造営・15世紀初期改修・1620年改修）の発掘調査成果と、首里玉御殿＝玉陵（1501年造営）の調査報告書の分析を中心に、琉球王陵の変遷・構造的特質・思想的背景・国際関係などについて検討する。内容は、①琉球の王統と王陵、②浦添ようどれの変遷、③「見せる王陵」から「囲い込む王陵」へ、④王陵のモデルはグスクの宮殿（首里城正殿）、⑤王陵はニライ・カナイの王宮、⑥琉球王陵の成立と東アジア。参考文献：安里進『琉球の王権とグスク』日本史リブレット42、山川出版社、2008、1版2刷。

キーワード：王陵（Royal Mausoleum）、ようどれ（Yodore）、玉陵（Tama Udun）、首里城（Shuri Castle）、ニライカナイ（Nirai Kanai）

はじめに

琉球王国には、洗骨した遺骨を厨子¹⁾に納めて墓室に追葬していく独特な風習があった。墓の外観を建物形に仕上げ、墓室内に多数の厨子を収納し、墓口は追葬するために開閉できるようになっていた。このような風習と墓制は王族の陵墓から庶民の墓まで広くみられるが、とくに王陵には王権思想が色濃く反映され、王権思想の変化とともに王陵や厨子も型式変化をとげていった。

1) 沖縄では、洗骨した骨を納める蔵骨器を厨子（ジーシ）と呼んでいる。肉体が朽ち果てたあとの骨を洗い清めることで神になると信じられている。神格化した骨を納めるので厨子と呼んだのであろう。

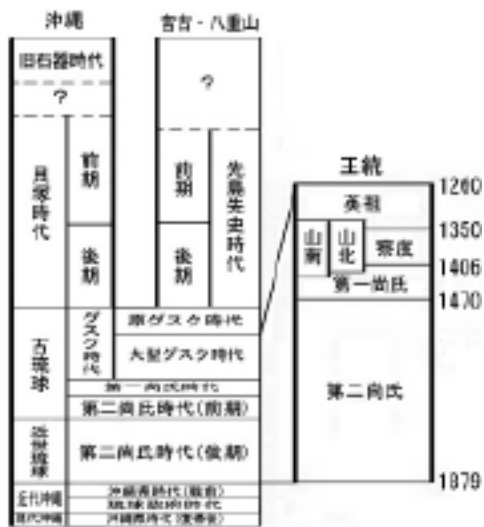


図1 琉球・沖縄の歴史と王統



図2 主な王陵の分布

琉球王国(中山)では、13世紀後半～19世紀後半の約600年間に4王統が交代した。また、14世紀前期～15世紀前期には、中山に対抗して沖縄島の北と南に山北・山南という小王国も存在した。これらの王統の陵墓は、13世紀後半から17世紀にかけて造営・改修され、浦添ようどれのように複数の王統によって継続使用された墓もあった。

この報告では琉球王国の陵墓制について、浦添ようどれや首里玉御殿(玉陵)²⁾などの中山王陵を中心に、その構造的特質と思想について論ずる。本稿に関連して琉球の王陵と庶民の墓制の関係について論じた拙論「てだがあなの王宮——沖縄の墓と王陵の思想——」(安里 2011)も参照していただきたい。

1. 琉球王国の陵墓

1) 陵墓の研究史

琉球王国の陵墓制について、正面から議論した研究は殆どなかったといってよいだろう。陵墓は、沖縄戦以前から現在にいたるまで、民俗的な墓制や祖先祭祀の中で扱われてきた(伊波 1927, 田辺 1972: pp.64-68, 沖縄県地域史協編 1989, 平敷 1995)。

沖縄戦以前は、首里玉御殿をはじめ多くの陵墓が第二尚氏王家の墓として使用され、あるいは祭祀の対象となっていたため、墓室内部の学術調査を行うことは不可能であった。陵墓以外でも、墓を開けることに対する習俗上の強い抵抗感から、風葬墓や洞穴墓などを除いては学術的な調査はほとんど行われ

2) 世界遺産に登録されている「玉陵」の名称について、高良倉吉は、「玉御殿は漢文表記では『玉陵』で、一般にも玉陵と書いて『たまおどん』『たまうどうん』と無理に読ませているが、王府レベルの行政文書では「玉御殿」と表記されるのが常である」(高良 1989a: p.172)と指摘し、「首里玉御殿」の名称を使用している。

なかった。陵墓関係では今帰仁村の百按司墓が調査されただけだった。

沖縄戦は、陵墓調査の大きな転換点となった。沖縄戦で浦添ようどれや首里玉御殿が破壊され、その修復のために墓室内部の調査が行われることになったからだ。1955～56年に、浦添ようどれの墓室調査と修復、伊是名玉御殿の調査などが行われた（琉球政府文保委 1956）。1974～77年には、首里玉御殿の墓室調査と修復が行われ、その関連調査として浦添ようどれと伊是名玉御殿の墓室調査も行われている（重文玉陵復原修理委 1977）。

陵墓の内部状況が明らかになり、これをふまえた高良倉吉による陵墓の被葬者や葬制をめぐる問題提起（高良 1989a: pp.141-288, 1989b: pp.40-45）があったものの、陵墓制の議論には展開しなかった。陵墓をめぐる主な議論は、首里玉御殿の王の厨子に記された「王」と「公」をめぐる「琉球王国論争」（大林・谷川・森編 1983: pp.59-158, 高良 1989a: pp.141-190）、首里玉御殿の被葬者の問題³⁾、そして浦添ようどれの石厨子の製作年代をめぐる論争⁴⁾であった。

陵墓の構造やその思想が問題にされるようになったきっかけは、1996～2005年の浦添ようどれ復元整備事業であった。この事業で、浦添ようどれの構造が歴史的に変遷してきたことが判明し、その背景には王権思想の変化があったことや、大型グスクの正殿・御庭との構造的対応があることも指摘された（安里 2006b: pp.38-47）。琉球王国の陵墓制の研究はようやく第一歩を踏み出そうとしている。

2) 琉球の王統と陵墓

琉球王家（中山）の家譜（『中山世鑑』『中山世譜』）によると、中山では舜天王統（1187～1259）、英祖王統（1260～1349）、察度王統（1350～1405）、第一尚氏王統（1406～1469）、第二尚氏王統（1470～1879）の王統交代があったという。現在では、舜天王統は伝説上の王統だと考えられている。

中山の陵墓は、「ようどれ」（ユードゥリ）⁵⁾、「玉御殿」（タマウドゥン）、「御墓」（ウハカ）、「墓」（ハカ）などと呼ばれている。ようどれや玉御殿は、漢文表記では玉陵・陵・山などと書く。追尊王を含む王・王妃のほか王夫人・王子・王女などが葬られている。御墓や墓には王妃・王夫人・王子・王女などが葬られている。陵墓のうち、王や追尊王などが葬られたようどれや玉御殿が本稿でいう王陵である。

中山の陵墓には、英祖王統の浦添ようどれ、第一尚氏王統の佐敷ようどれ・天山ようどれ、第二尚氏王統の首里玉御殿・伊是名玉御殿・山川玉御殿・宝口玉御殿・天山御墓・山川御墓・西森御墓・城間御墓などがある。このほか、山北王統ないしは第一尚氏系北山監守の墓といわれる百按司墓、山南王統の他魯每王の墓などがある。

上記の陵墓のうち、墓室内部、全体構造、改修の履歴などが把握できるのは、浦添ようどれ・天山ようどれ・首里玉御殿・伊是名玉御殿などの中山王陵である。これら4基の中山王陵が本稿の分析対象である。つぎに、4王陵の立地、造営と改修の履歴、墓の構造、被葬者などについてみていくことにしよう。

3) 第二尚氏の開祖尚円王の妃が、首里玉御殿に葬られたのか伊是名玉御殿に葬られたのかをめぐる問題。高良 1989a: 255-287参照。

4) 1955～62年にかけて行われた浦添ようどれ石厨子をめぐる奥里将建・外間正幸・松久宗悦・鎌倉芳太郎らの論争（知名 2005: pp.28参照）。

5) ようどれは琉球語で夕風のことだが、この語が王陵を意味するようになった理由は定かではない。

2. 中山王陵の型式変遷

1) 浦添ようどれ

極楽山・極楽陵ともいう。咸淳年間（1265-1274）に英祖王が造営したと伝えられる掘込墓⁶⁾で、1620年（昌泰1）には尚寧王族の陵墓に改修された。首里に王都が形成される以前の英祖・察度王統の居城といわれる浦添グスクの北側崖下に北面して造営されている。交易港である牧港をはじめ中山が支配した沖縄島中部の大半を眺望することができる。浦添ようどれに隣接して沖縄戦前まで「御墓番」の屋敷があった。

沖縄戦で壊滅したあと、1956年に琉球政府が墓室を修復し、1996～2005年にかけて浦添市教育委員会が墓室・墓域の発掘調査を行い（浦添市教委 2001・2005a・2005b・2007a）、ほぼ沖縄戦前どおりの形に復元された（浦添市教委 2007b）。発掘調査の結果、造営年代は英祖王代の1273年（咸淳9癸酉）で、1620年と15世紀前期（尚巴志王代 1422-1439）に大規模な改修が行われたことが判明した。

浦添ようどれの変遷は、造営と2度の改修を基準にして3期に区分できる（図6）。各時期の墓制は、つぎのような構造だったと考えられる（安里・宮里・木下 2005, 安里 2006b : pp.66-75）。

第Ⅰ期＝初期浦添ようどれ（1273年～15世紀前期）。英祖王代の造営から尚巴志王代に改修される前の木榔墓⁷⁾。断崖下に人力掘削した東西2つの掘込型の墓室をつくる。墓室はオープン構造で天井が高く、高麗系瓦葺きの礎石建物（木榔）が建てられていた。そのなかに鍍金金具で飾られた高床建物形の漆塗板厨子が数基安置されていたと考えられる。墓庭は自然地形を利用したテラス状の庭で、庭を囲い込む石牆はまだ存在しない。漆塗板厨子には、火葬や洗骨された英祖王族の遺骨が合葬されていたと考えられるが、英祖王統だけでなく次の察度王統の王族も葬られていた可能性がある⁸⁾。

第Ⅱ期（15世紀前期～1620年）。尚巴志王代の改修から尚寧王代の改修前までの掘込墓。全面的に石積み構造化された。擁壁を積んで墓庭を拡張して「一番庭」と「二番庭」を造成し、高い石牆で囲い込ん



図3 復元された浦添ようどれ（2005年）



図4 浦添ようどれ西室

6) 崖面や丘に横穴を掘った掘込型の墓室を石積で塞いだ沖縄の伝統的な墓型式。

7) 自然洞窟や掘込型の墓室内または地上に、木榔（木造建物）を建ててその中に厨子や遺骨を納める型式の墓（安里 2011 : p.35）。

8) 察度王陵がどこにあるのかは不明である。察度王統も英祖王統と同じく浦添グスクを居城としていたので、浦添ようどれが察度王陵として使用された可能性がある。

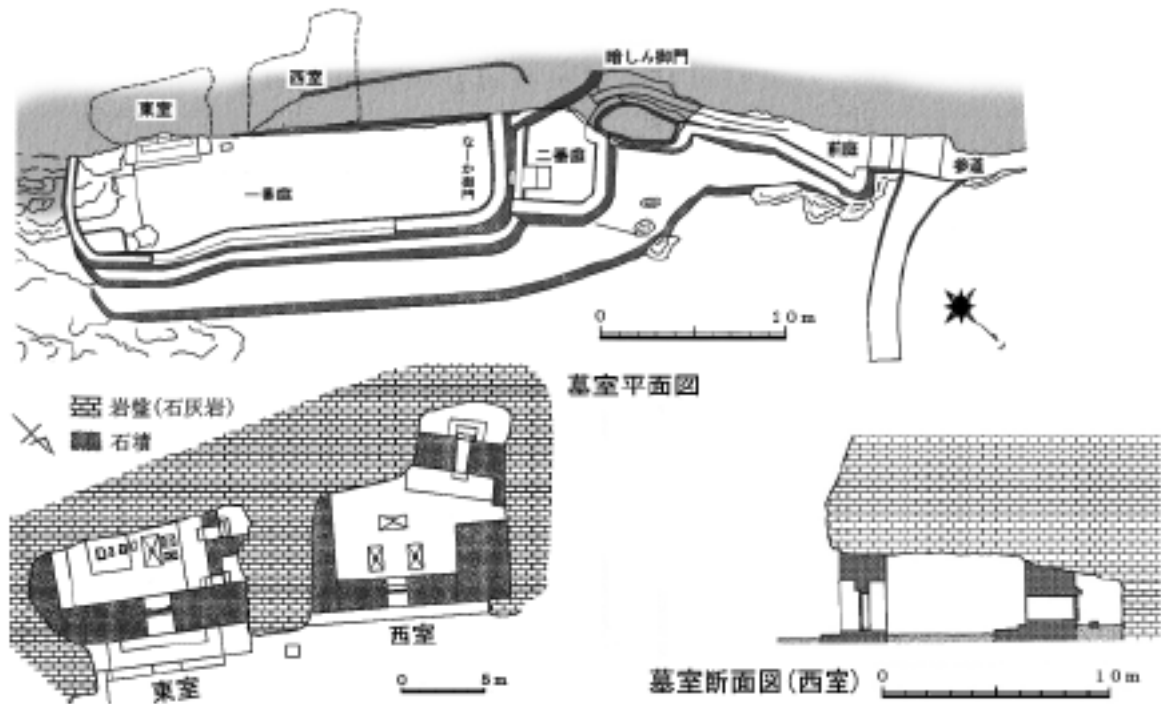
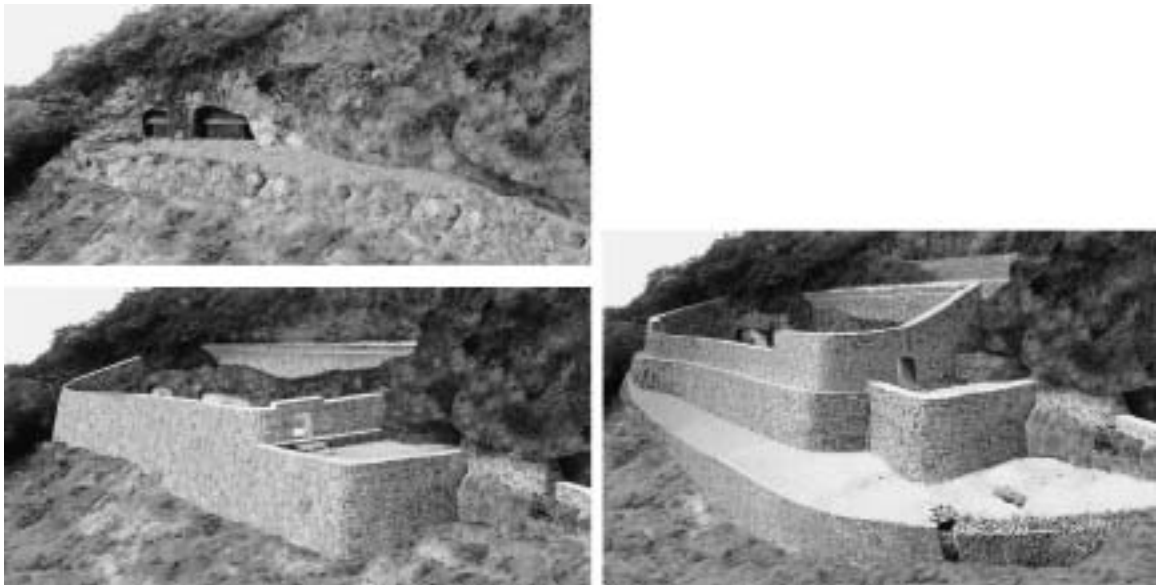


図5 浦添ようどれ平面図



第Ⅱ期 15世紀前期～1620年（尚寧王代）

第Ⅲ期 1620年～1945年（沖縄戦）

図6 浦添ようどれの変遷（安里 2006b より）

ている。墓庭への通路「暗しん御門」もこの時期に自然岩盤の亀裂を加工して人工のトンネル構造に仕上げたとみられる。第Ⅰ期の高麗系瓦葺きの礎石建物と漆塗板厨子を廃棄して、新たに基壇宮殿形と基壇がない宮殿形の青石厨子⁹⁾が設置された。墓室内壁面を石積で整え墓室前面も石積で塞いで漆喰で白

9) 中国泉州産の輝緑岩で、琉球と泉州では「青石」と呼んでいる。

化粧し、アーチ構造の墓口には扉（おそらく板戸^{いたど}）を設けたと考えられる。西室には、墓口の左右に窓が設けられ、墓室内の2基の宮殿形石厨子には第一尚氏王族と思われる洗骨された骨が納められている。16世紀には、第二尚氏王族の尚維衡^{しょういこう}が浦添グスクに封じられた。尚維衡は1540年（嘉靖19）に没してその遺骨はいったん浦添ようどれに葬られが、その後、首里玉御殿に移葬された。

第Ⅲ期（1620年～1945年）。尚寧王代の改修から沖縄戦までの掘込墓。1620年の改修で一番庭がさらに拡張された。一番庭を囲む石牆も約2～9mと高くなり、沖縄戦以前のような形になった。18世紀初期の「浦添ようどれ絵図」¹⁰⁾や沖縄戦前の写真によると、墓口扉は石製である。墓室表が漆喰化粧され、墓口の石扉は把手のついた観音開きになっている。19世紀には、石扉の上から石積で塞いで漆喰で封じられた。1620年の改修で、東室に琉球石灰岩製石厨子3基が追加配置されて尚寧王とその一族が葬られた。1759年（乾隆24）には、天山御墓（天山ようどれ）に葬られていた尚寧王妃の遺骨が西室に移葬され、琉球石灰岩製の石厨子1基が追加された。その際に、天山御墓にあった青石製の基壇宮殿形石厨子の屋根蓋も一番庭に運び込まれたと考えられる。

2) 天山ようどれ

天山陵・天山御墓ともいう。15世紀前期に第一尚氏第2代尚巴志王の墓として造営された。伊波普猷は「天山のようどれ」と呼んでいる（伊波 1927 : pp.306-307）。英祖王陵の「浦添ようどれ」や第一尚氏王陵の一つが「佐敷ようどれ」と呼ばれていることから、第一尚氏王陵の名称としては、伊波がいうように「天山ようどれ」と呼ぶのが妥当であろう。第二尚氏時代には北谷王子^{ちやたん}に下賜されて「天山御墓」と呼ばれた。

王都首里の域内に造営され、首里城から約400m南にある。狭い谷間の南面する崖面に造営された掘込墓である。東室・中室・西室の3室があったといわれている。沖縄戦とその後の採石工事で壊滅し、かろうじて墓室の一部が残存していた。1983年に沖縄県教育委員会によって東室の羨道と奥室の発掘調査が行われ、奥室は、幅約5.1m、天井高約3mと推定され（奥行きは不明）、奥室入口には観音開きの青石製扉があったと考えられている（安里・盛本 1984）。

『歴代宝案』（第1集40の20）によると、尚巴志王は1439年（正統4）に没して「天齋山」に葬られた。天齋山は天山ようどれのこと（東恩納 1950 : pp.118-119）、1439年には造営されていたと考えられている（知名 2008 : p.64）。1456年（景泰7）に琉球に漂着して1461年（天順5）に朝鮮に送還された朝鮮人梁成と高石寿は、1460年（天順4）に死去した尚泰久王^{しょうたいきゅう}の葬儀を実際に見たと思われる。梁成らは、「国王の葬礼は、巖を鑿ちて壙と為し、壙内の四面に板を編みて之を立て、^{ただち}遂に棺^{ほうむる}を^た。板門を作り鑰鎖（鍵）を以て之に使う。墓前及び両傍に屋を構え、守墓の人は之に居す。墓を環りて石城を築く。城に一門有り」（『朝鮮王朝実録』世祖8年2月16日の条、池谷ほか 2005 : p.142）と語っている。尚泰久王が葬られた王陵が天山ようどれだと考えられる。

第一尚氏滅亡（1469年）後は、第二尚氏王族の北谷家の墓として使われて「天山御墓」とよばれた。18世紀初期の「首里古地図」では、掘込墓の表を石積で塞いでアーチ形の墓口を設け、墓庭を石牆で囲

10) 「浦添ようどれ絵図」は1701-1707年に絵図并差図奉行の稲福親雲上盛時によって作成された（伊従 2007 : p.42）。



図7 18世紀の天山ようどれ（「首里古地図」部分）
（沖縄県立図書館所蔵）



図8 天山ようどれ（伊東忠太スケッチ）
（日本建築学会所蔵）

い込んでいる（図7）。1924年（大正13）の伊東忠太の「墓 尚巴志王陵？（首里）」と題した東室と思われるスケッチ¹¹⁾では、墓室表を石積で塞いでアーチ形の墓口とその左右に窓を設けた墓と、墓庭に半ば土に埋もれた状態の箱形容器が描かれている（図8）。沖縄戦後、西室付近から青石製基壇形台座が発見されているが、東室前のこの箱形容器は、首里の達磨峰西来院（だるま寺）に保管されている青石厨子の棺身部破片と思われる。これらの青石製の台座と棺身部は、もともとは浦添ようどれ一番庭に置かれている青石製方形造り屋根部と一組で、浦添ようどれの基壇宮殿形石厨子と同型式の青石厨子が天山ようどれ内に安置されていたと考えられる¹²⁾。

以上から推定できる第一尚氏時代の天山ようどれは、掘込墓にアーチ形の墓口と窓を設けて板戸を取り付け、墓室内には青石製の基壇宮殿型石厨子を安置し、墓庭は石牆で囲い込む構造で、第Ⅱ期浦添ようどれと同型式の王陵だったと考えられる。第Ⅱ期浦添ようどれ以後の王陵では火葬がみられなくなり殆どが洗骨されていることから、天山ようどれでも洗骨が主流だったと思われる。

3) 首里玉御殿

世界遺産に登録されている玉陵である。琉球最大の破風墓¹³⁾で、首里城の西側約300mの丘陵斜面に造営されている。第二尚氏第3代尚真王によって1501年（弘治14）頃に造営され、沖縄戦直前（1945年）まで使用された。沖縄戦で大破したが、1955年頃から尚家による修復が始まり、1974～77年の修理でほぼ沖縄戦前の形に復元された（重文玉陵復原修理委 1977）。

石灰岩丘陵の北側斜面に自然洞窟を掘り広げた掘込型の墓室をつくる。墓室の外観は、切妻建物形の連棟式で、灰黒色の磚瓦で板葺き屋根を表現し、墓室表は漆喰で白化粧されている。墓室前面の基壇には欄干が取り付けられている。墓室は東室・中室・西室の3室からなる。東室は外観二層、中室・西室は一層構造。墓口はアーチ形で、青石製扉が取り付けられているが、これは造営当初は板戸だったと考

11) 日本建築学会所蔵。沖縄タイムス 2003年5月31日記事「戦前の建物スケッチ」参照。

12) 知名定寛は、それぞれ別部材で3基の青石厨子の存在を想定している（知名 2005：pp.44-45）。

13) 掘込墓の外観を切妻破風建物形に造形した沖縄の伝統的な墓型式のひとつ。



図9 首里玉御殿（玉陵）全景（沖縄県教委 1996 より）

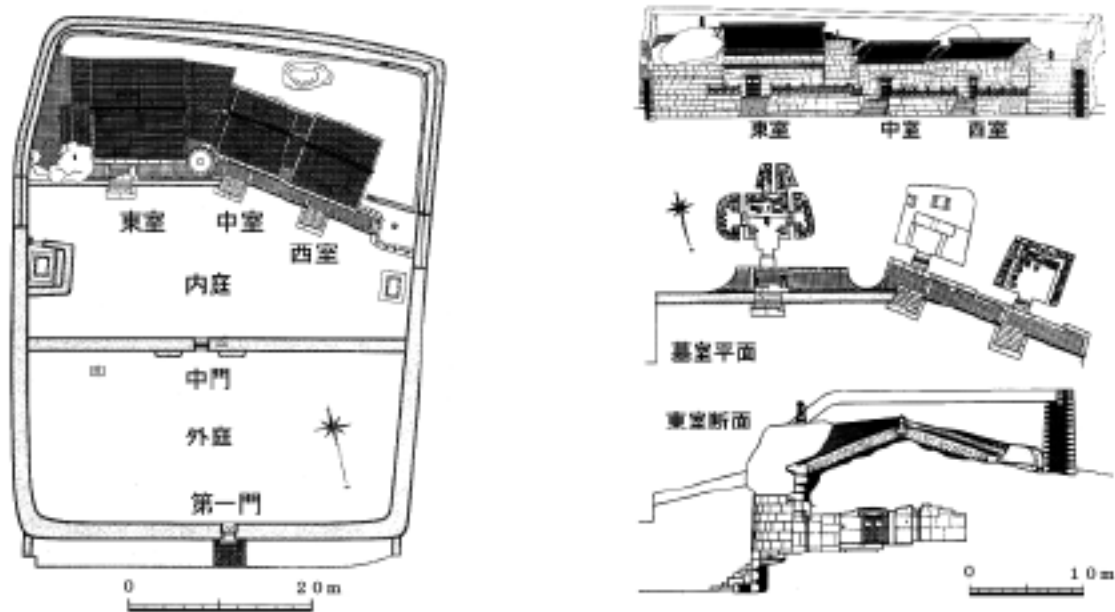


図10 首里玉御殿（重文玉陵復原修理委 1997 に加筆）

えられている（伊波 1927：pp.318-319）。各墓室内は、側壁面を石積みで整え、床面を石敷きになっている。中室・西室は単室構造だが、東室は主室の他に奥室と両側に耳室を設け、それぞれに石扉が取り付けられている。墓域全体の形は、3～6mの高い石牆で囲まれたややいびつな長方形である。墓庭は、中門と石牆で内庭と外庭に仕切られている。内庭に白いエダサンゴ砂利を敷き、外庭には白い海砂を敷き詰める。

18世紀初頭に「浦添ようどれ絵図」と同時期に描かれた「玉御殿差図」の模写図¹⁴⁾も上記した沖縄戦

14) 東京大学史料編纂所所蔵の『首里城並諸方絵図間付差図帳』。伊従 2007 参照。

前の形と殆ど同一である。1748年（乾隆13）には、墓域外の東西に「御番所」が創建された（『球陽』巻14尚敬36年）。現在の形は、一部に近世の補修¹⁵⁾があるが16世紀の形を保っていると考えられる。

原則として東室には王・王妃の厨子、西室には王子・王女・王夫人などの厨子、中室には洗骨前の遺体がそれぞれ安置された。厨子は、東室に37基、中室に1基、西室に32基がそれぞれ配置されていた。造営当初の厨子は、基壇宮殿形の青石厨子4基だったと考えられるが、1526（嘉靖5）に死去した尚真王の厨子から琉球石灰岩製石厨子が用いられるようになり、18世紀には焼物厨子に変わっていった。

被葬者の殆どが洗骨され、火葬の可能性がある骨は19世紀の2基の厨子に認められただけであった（重文玉陵復原修理委 1977：p.67）。

4) 伊是名玉御殿

第二尚氏の開祖尚円王の出身地である伊是名島にある。琉球王国時代には「伊平屋島玉御殿」とよばれた。尚円王の父（追尊王尚稷^{しゅうしよく}）・姉・叔母・叔父とその子孫が葬られていたといわれている。このほか、尚円王妃も葬られている可能性がある。島の南東海岸に突出した三角形の岩山に伊是名グスクが築かれているが、その北側崖面を背に北面して立地する。1956年と1977年に東室の調査が行われ（琉球政府文保委 1956、重文玉陵復原修理委 1977）、2005年には東西墓室の調査が行われた（首里城研究会編 2006）。

『琉球国由来記』（横山編 1972：pp.517-518）によると、尚真王代（1477～1526）に造営された¹⁶⁾。当初は、瓦葺建物内に板葺建物（木槨）が建てられた二重構造の木槨墓で、2基の青石製の基壇宮殿形石厨子が安置されていたという。墓庭は、エダサンゴ砂利敷きで、サンゴ石を積み上げた石牆で囲い込み、アーチ門を設ける。1668年（康熙7）にはこの建物の修理が行われている。現在でも墓庭や周辺に灰色瓦片が多数散布しており、瓦葺建物が存在していたことを裏付けている。

その後、建物が大破したため、1688年（康熙27）に平地式破風墓¹⁷⁾（切妻形石造建物）に改築されてほ



図11 伊是名玉御殿全景



図12 伊是名玉御殿墓室（新里涼子氏撮影）

15) 近世の補修記録には、1709年の墓口扉の改修ほかに、1868年（『球陽』巻22尚泰21年）にも修補の記事がある。基壇の赤焼き磚敷き、屋根一部の赤瓦も近世の修理と考えられる。

16) 伊是名島には伊是名玉御殿の移転伝承があり、造営当初から現位置だったのかは検討の余地がある。

17) 崖面に墓室を掘らずに地上に破風形の石造墓を構築する墓型式。

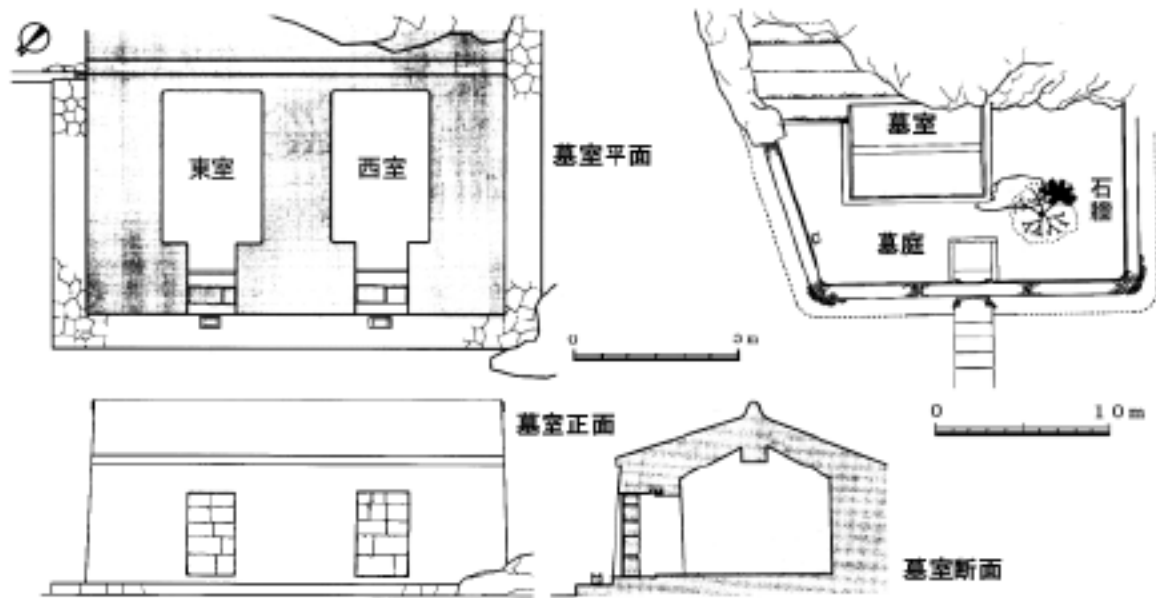


図13 伊是名玉御殿（福島 2006 に加筆）

ほ現在の形になった。墓口は方形で板戸である。墓室内は東西2室に仕切られている。床面は石敷きの上にエダサンゴ砂利を敷き、壁面は漆喰白化粧し、琉球石灰岩の天井板にも胡粉と思われる白色塗料を塗っている（安里 2006a:p.30）。1751年（乾隆16）の重修では、墓室外面の漆喰を塗り替え、墓口は板戸から石積閉塞に変えられた（高良 2006:p.59）。

1688年の改築以後は、東室には青石厨子2基が安置されたほか、東室と西室に関係者の厨子も追葬されていたが、1870年（同治9）の重修の際に厨子の再配置が行われ、東室には青石厨子2基を残し、他の厨子は全て西室に移された（高良 2006:p.70）。

5) 中山王陵の型式変遷

以上に紹介した中山王陵を整理すると、造営と改修初期の状態を基準にしてつぎの4型式に分類・編年できる。

初期浦添ようどれ型。1273～15世紀前期までの初期浦添ようどれ。人力掘削した大きな掘込型の墓室内に木槨（瓦葺建物）を建てた木槨墓で、その中に漆塗り高床建物形板厨子を安置する。墓室は閉塞せずに開放されている。火葬と洗骨が行われている。

天山ようどれ型。15世紀の天山ようどれと第Ⅱ期浦添ようどれ。大きな掘込型の墓室を石積で閉塞してアーチ形墓口を設けて板戸を付ける。墓室内に青石製の基壇宮殿形石厨子を安置する。墓域全体を高い石牆で囲い込んで門（おそらくアーチ門）を設ける。墓室前面と墓室内を漆喰化粧する。洗骨が主流になる。

首里玉御殿型。16世紀の首里玉御殿。掘込型の墓室を石積で閉塞してアーチ形墓口を設けた破風墓。墓室前面を漆喰化粧する。墓室内に青石製の基壇宮殿形石厨子や琉球石灰岩製の家形石厨子を安置し、

沖縄の墓の諸要素		火葬	板厨子	木槨	掘込墓	洗骨	墓室閉塞	板戸	漆喰化粧	石厨子	石垣囲い	破風屋根	平地構築	焼物厨子
1273年造営	初期浦添ようどれ	●	●	●	●	●								
1420年頃造営 15世紀前半改修	天山ようどれ 第Ⅱ期浦添ようどれ				●	●	●	●	●	●	●			
1501年頃造営	古琉球期首里玉御殿				●	●	●	●	●	●	●	●		
1688年改築	近世期伊是名玉御殿					●	●	●	●	●	●	●	●	●

図14 王陵の諸要素の変遷

墓室外観を切妻破風建物形に造形する。墓口には板戸を付け¹⁸⁾、墓室前面に高い基壇と欄干を設置する¹⁹⁾。墓域を高い石牆で囲い込みアーチ形楣門を設け板戸をつける。洗骨のみになる。

近世伊是名玉御殿型。1688年改築以後の17世紀の伊是名玉御殿。地上に切妻破風形の石造建物を構築した平地式破風墓。方形の墓口に板戸をつける。建物内外面に漆喰白化粧する。墓域をサンゴ石の石牆で囲い込みアーチ門を設ける。墓室内には石厨子や焼物厨子が安置されている。

以上の中山王陵の各型式の諸要素の消長を整理したのが図14である。また、王陵を墓型式からみると、木槨墓→掘込墓→破風墓→平地式破風墓として変遷してきたことがわかる²⁰⁾。墓室外観が石造破風形の各型式の王陵の造営年代からみて、王陵が沖縄の伝統的な墓型式の祖型になったと考えられるが、その議論については拙論（安里 2010）に譲ることとする。このほか、百按司墓は、自然洞窟を利用した墓室だが板葺き木槨内に漆塗板厨子が安置されており、初期浦添ようどれ型に分類できる。他魯每王の墓も現在は破風墓だが、周辺の墓から漆塗板厨子片や鍍金金具が出土しており²¹⁾、造営当初は初期浦添ようどれ型だった可能性がある。

3. 中山王陵の構造的特質と思想

1) 中山王陵とグスクの正殿・御庭

中山王陵の各型式には共通する特徴がある。以下においては、拙文（安里 2006b・2010）を要約・補足しながら、中山王陵の構造的特質と思想についてみていくことにしたい。

18) 墓口や墓室内の石扉は造営当初から青石製扉だった可能性もあるが、ここでは、1534年（嘉靖13）に来琉した陳侃の『陳侃使録』や1709年（康熙48）に板戸を石扉に改修した家譜の記事にもとづいた伊波の板戸説を採用ことにした。

19) 欄干は、造営当初の首里玉御殿造には設置されておらず、1508年（正徳3）に首里玉御殿に欄干が設置された（『球陽』巻3 尚真32年）あとに、首里玉御殿にも設置された可能性があるが、ここでは欄干設置状態を首里玉御殿型としてとらえておく。

20) 1688年改築以前の伊是名玉御殿（瓦葺建物と木槨の二重構造）は、首里玉御殿型の破風墓から近世伊是名玉御殿型の平地式破風墓への移行期の「平地式の木造破風墓型」として設定できる可能性があるが、資料的根拠が十分ではないので、ここでは型式設定を保留した。

21) 筆者らの調査で、山南王族系のキミガメヌ墓からは朱漆塗り板厨子片が採集され、他魯每王墓の隣にある根人腹門中墓からも漆片と鍍金金具が採集されている。

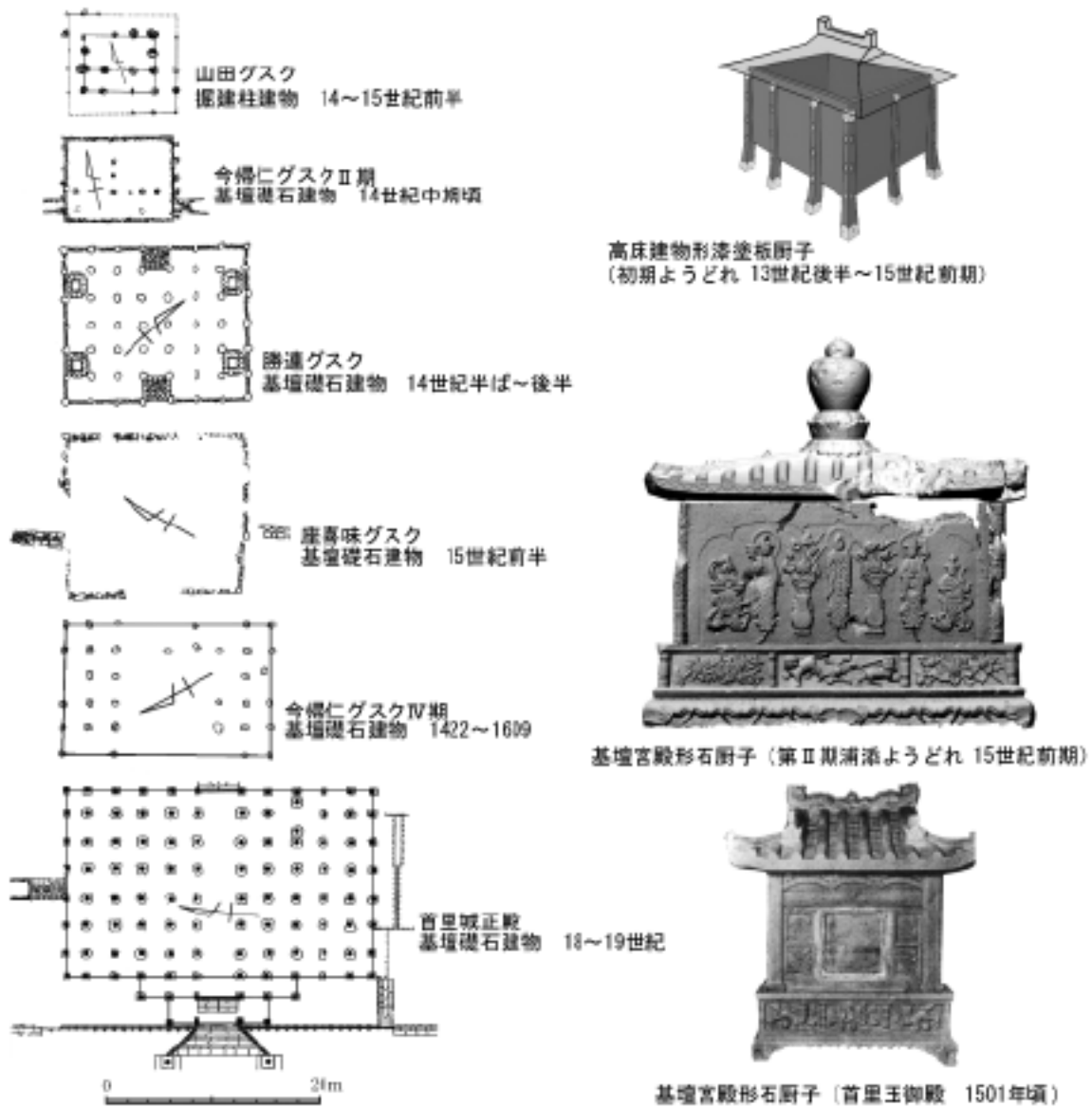


図15 大型グスクの正殿基壇遺構の変遷と王陵の厨子の変遷（安里 2006 に加筆）

王陵の厨子のモデルは、首里城などの大型グスクの正殿だった。大型グスクは寨官（^{さいかん}按司）や王の居城で、正殿とこれに^{うな}対面する広場（御庭）を中核施設にしている。大型グスクの正殿は、13～14世紀の掘建柱建物から14世紀には基壇礎石建物に変化した^あが、この変遷に対応して、王陵の厨子も変化した。初期浦添ようどれの厨子は高床建物形の漆塗板厨子だが、第Ⅱ期浦添ようどれ・天山ようどれ・首里玉御殿では基壇宮殿形石厨子に変化する（図15）。

厨子配置にも、グスクの正殿御庭と同様な構造が認められる。第Ⅱ期浦添ようどれ西室の3基の青石厨子は、中央の空間を^{うな}囲むようにコ字形に配置されている（図16）。中央の基壇宮殿形の青石厨子がグスクの基壇礎石建物の正殿に相当し、左右の青石厨子には王権を象徴する基壇がない。この配置は、首里城の御庭を取り囲む正殿・南殿・北殿の配置と同一構造になっている。

首里玉御殿の東室外観も首里城正殿をモデルにして造形されている（図17）。16世紀初期の首里城正殿

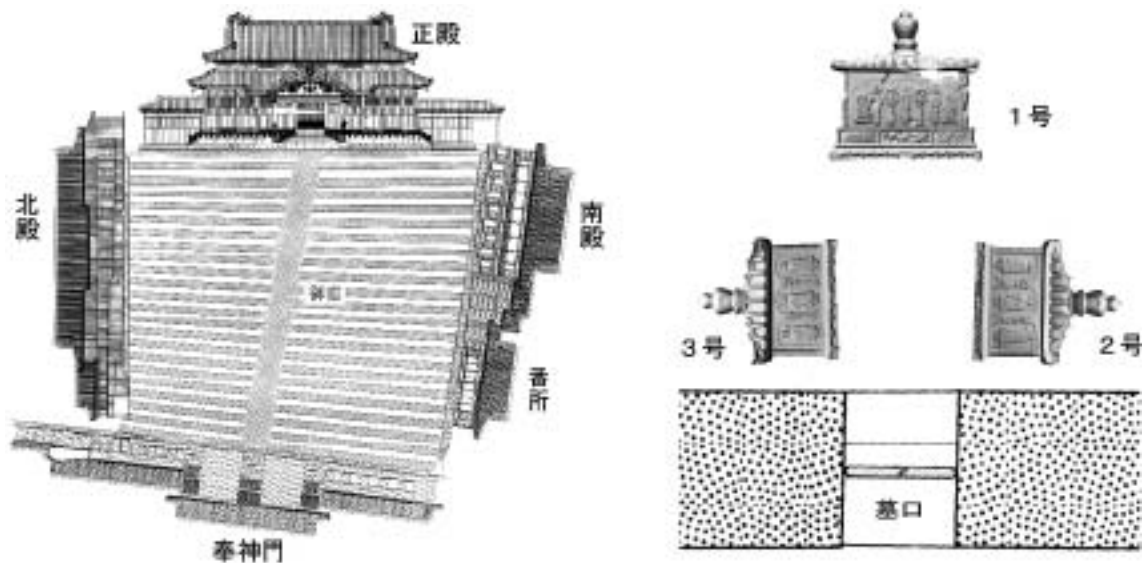


図16 首里城正殿・御庭と第Ⅱ期浦添ようどれ西室の厨子配置（安里 2006b より）

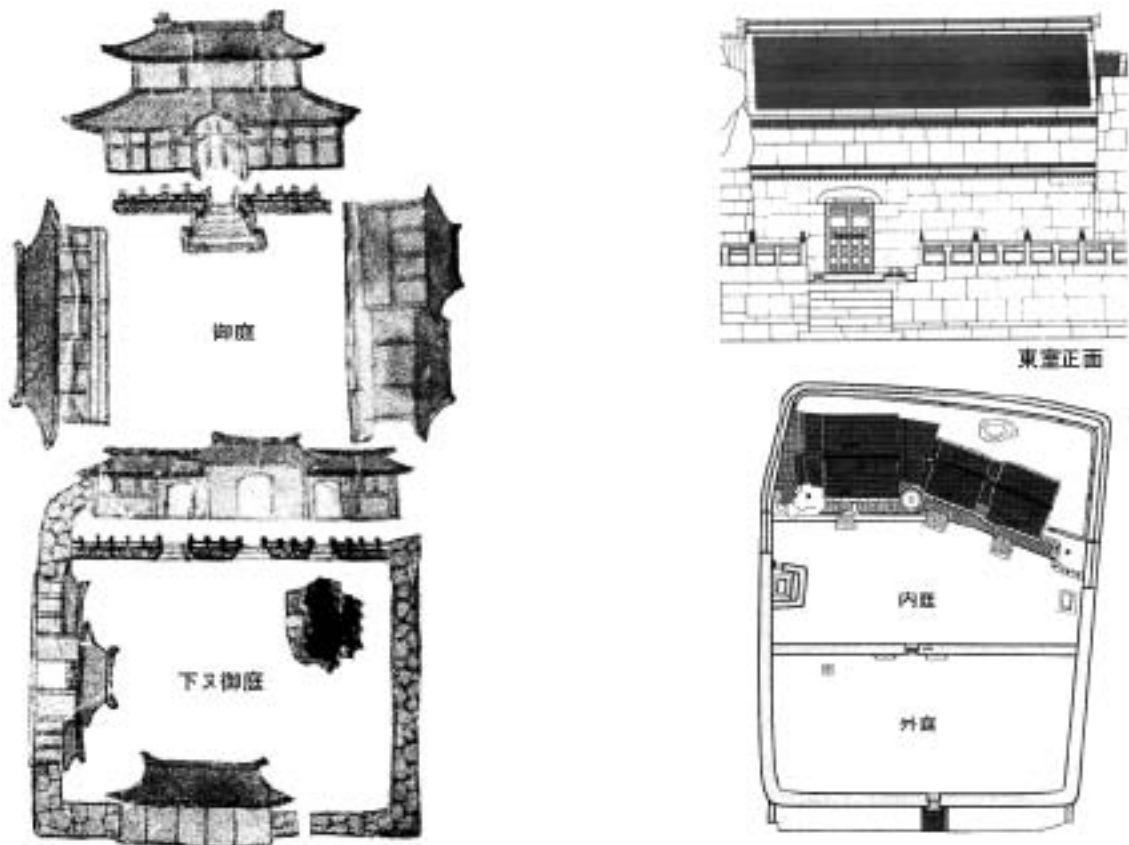


図17 首里城正殿・御庭と首里玉御殿
 (『首里古地図』(鎌倉芳太郎撮影)と重文玉陵復原修理委 1977 から作成)

は、外観二層の板葺き建物で赤色顔料を塗装し、王権を象徴する高い基壇には欄干が設置されていた。一方、首里玉御殿の東室は、外観二層構造、板葺きを表した磚瓦敷きの屋根、高い基壇と欄干などの特徴から、16世紀の首里城正殿をモデルにしていたことがわかる。

首里玉御殿の全体構造も首里城正殿・御庭と同一である。首里城正殿には神聖空間である御庭の外側に「^{しちやぬうな}下ヌ御庭」がある。首里玉御殿の墓庭も中門と石牆で内庭と外庭に仕切られ、首里城の御庭・下ヌ御庭に対応した構造になっている。内庭はエダサンゴ砂利敷き、外庭は海砂敷きで区別し、内庭は王族だけが立ち入ることができる聖域であった。次の近世伊是名玉御殿の墓室もグスク正殿がモデルだったと考えられるが、首里玉御殿ほどの徹底さはない。

中山王陵は、一貫して首里城などの大型グスクの正殿をモデルにしていたが、これは、墓室内の厨子形態や厨子配置に正殿・御庭を表現した初期浦添ようどれ型や天山ようどれ型の段階から、墓室・墓域全体を首里城正殿・御庭と同一構造にした首里玉御殿へと発達してピークを迎えたといえるだろう。

2) ニライカナイの王宮

グスク正殿が現世の王宮なら、グスク正殿をモデルにした王陵は死後の王宮である。では、死後の王宮がある他界はどのように観念され、王陵の構造に反映されていたのだろうか。

第二尚氏王統は、国王を太陽神の末裔として神聖化した。第二尚氏の鼻祖に位置づけられていた英祖王は、「てだこ」（太陽の子）とされ、第二尚氏はその王権を継承していると考えられていた。このような王権思想は「てだこ思想」「^{てだこ}太陽子思想」「^{わかてだ}若太陽思想」などと呼ばれ、その成立時期は英祖王代か、第二尚氏尚真王代それとも尚清王代かをめぐって議論されてきた（比嘉 1991, 知名 1994, 外間 2006）。

太陽子思想はニライカナイ信仰と結びついていた。中山王権が観念したニライカナイという他界は神の島といわれる^{くだか}久高島の東方彼方の地底にある太陽神の居所と考えられている。そこには太陽が生まれ



図18 斎場御嶽と久高島（安里 2006b より）



図19 浦添ようどれのトンネル（暗しん御門）と二番庭・一番庭の白の空間（安里 2006b より）

出る「てだがあな」（太陽の穴）がある。てだがあなから生まれた太陽は、西の彼方に沈んだあと地底のトンネルを通過しててだがあなから再生すると信じられていた（平山 1987, 中本 1990, 比嘉 1991）。王を太陽神と同一視する王権思想からすると、太陽神としての王が死後に帰り着いて再生する場所がニライカナイのてだがあなということになる。

中山の王権思想とニライカナイ信仰を具体的な形で表現したのが^{せーふあうたき}斎場御嶽である（図18）。斎場御嶽は中山王権の最高聖地の一つで、この御嶽の真東に久高島がある。斎場御嶽の^{さんぐーい}三庫理と呼ばれる場所には、自然のトンネルがありこの通路をとおって、久高島を遙拝する構造になっている。かつては、大岩に視界が遮られて直接久高島を望むことはできなかったようだが、トンネルがニライカナイへの地下通路として設定されていたことには変わりない。

第Ⅱ期浦添ようどれは、斎場御嶽と同じ構造になっている（図19）。浦添ようどれは、断崖に沿って東方海上の久高島を遠望しながら参道を下りて墓域に入る。そしてトンネル（暗しん御門）をくぐり抜けて二番庭から一番庭へと進む。一番庭の崖面に掘削された墓室内には、グスクの正殿・御庭を表現した厨子配置がなされていた。浦添ようどれのこのような構造は、東方へ向かう地下通路を通過してニライカナイに至り、そこにあるてだがあな（墓室）に、死後の王宮があるという設定だと考えられる。

3) 白い王陵

ニライカナイは白い世界として観念されていたらしい。浦添ようどれは2005年に復元されたが、復元されてから数年間は白く眩しい王陵だった。入口の暗しん御門のトンネルを抜けると白く眩しい空間（二番庭）に入る。二番庭は、白い石肌の琉球石灰岩の石積で囲われ、床面にも琉球石灰岩の白い^{いしご}石粉が敷

かされている。二番庭から、聖域への入口を象徴するアーチ門²²⁾を通ると、一番庭も高い石垣で囲まれ、庭に石粉を敷いた白く眩しい空間になっている。墓室表も漆喰で白化粧されている。墓室内も、掘削された白い岩肌の岩盤と床面に敷かれた石粉、そして壁面石積も漆喰白化粧されている。徹底して白い空間を演出しようという意図が明らかだ。このような光景が、第Ⅱ期浦添ようどれの造営当初の姿だったにちがいない。

白い王陵に仕上げる行為は、首里玉御殿や伊是名玉御殿にも共通して認められる。造営当初の首里玉御殿も、白い石垣で囲まれた庭には白いエダサンゴや海砂が敷かれ、墓室表も漆喰で白化粧されていた。近世伊是名玉御殿も白いサンゴ石の石牆で囲み、庭には白いエダサンゴを敷きつめ、墓室建物も全面的に漆喰白化粧された。墓室内も床面に白いエダサンゴを敷きつめ、内壁を漆喰白化粧し、天井までも白色塗料を塗って白い空間に仕上げていた。2005年の調査後も石造建物の漆喰塗り直しが行われて、造営当初の白い王陵が再現された(図12)。

むすび

中山王陵は、ニライカナイの「てだがあな」(太陽の穴)にある王宮として、グスクの正殿・御庭をモデルに造営された。特に第Ⅱ期浦添ようどれば、ニライカナイを地下トンネルの向こうにある白い世界としてイメージした王陵に仕上げられた。このような構造的特質をもつ中山王陵は、王を太陽神の末裔に位置づける王権思想=太陽子思想の具現化としてとらえることができる。このように理解すると、中山王陵の型式変遷のなかに太陽子思想の成立時期を読みとることが可能になる。

王陵からみた太陽子思想の成立は、暗しん御門^{くらしんうじょう}と白い王陵が成立した第Ⅱ期浦添ようどれの時期、つまり第一尚氏時代と考えられる。しかし、第一尚氏の初期に太陽子思想が突然発生したとは思えない。初期浦添ようどれの立地が久高島との位置関係において設定されていることや、てだがあなをイメージした掘込型の墓室を造営している点で、太陽子思想の形成は英祖王代の初期浦添ようどれの造営時期にさかのぼると思われる。

一方、初期浦添ようどれ型から天山ようどれ型へという王陵の発達は、「見せる王陵」から「囲い込む王陵」への転換期でもあった。初期浦添ようどれの立地的特徴のひとつは、英祖王権の交易港といわれる牧港^{まきみなと}を見下ろしていることにある。逆に見れば牧港に外国船が入港する際には、断崖の洞窟内に建つ瓦葺木槨の浦添ようどれを正面に遠望するようになっている。このような立地は、百按司墓^{むむじやな}や佐敷ようどれにも共通している。百按司墓は運天港^{うんでん}を見下ろす断崖下に、佐敷ようどれは馬天港^{ばてん}を見下ろす断崖下に、それぞれ造営されている(図20)。このような立地の王陵は、王の権力を誇示する「見せる王陵」として造営されたと考えられる。

これに対し、第Ⅱ期浦添ようどれは高い石牆で囲い込まれている。天山ようどれと首里玉御殿は、高い石牆で囲い込むだけでなく、立地自体の眺望が良くない。このような天山ようどれ型や首里玉御殿型の王陵は「囲い込む王陵」で、王陵内部を隠すことで王権を神聖化するという意図がうかがえる。この

22) アーチ形の門は、グスク・御嶽・寺院・墓などの聖域の入口構造に取り入れられている。



図20 浦添ようどれ・佐敷ようどれ・百按司墓の立地

王権神聖化の思想が太陽子思想だったと考えられる。

引用文献

- 安里嗣淳・盛本勲 1984「天山陵跡調査の概略」『紀要』第1号，沖縄県教育委員会文化課，pp.13-34，沖縄。
- 安里 進 2006a「伊是名玉御殿の考古学的調査」『首里城研究』No.9 特集伊是名玉御殿調査報告，首里城研究会編，pp.30-48，沖縄。
- ◇ 2006b『琉球の王権とグスク』山川出版社，東京。
 - ◇ 2008「英祖王陵浦添ようどれの造営と改修の年代」『第11回琉中歴史関係国際学術会議論文集』琉球中国関係国際学術会議，pp.197-216，沖縄。
 - ◇ 2010「てだがあなの王宮——沖縄の墓と王陵の思想——」『IJOS: International Journal of Okinawa Studies』Vol.1 no.2，琉球大学国際沖縄研究所，pp.1-14，沖縄。
- 安里進・宮里信勇・木下秋海 2005「浦添ようどれ石厨子と遺骨の調査成果の検討」『浦添ようどれの石厨子と遺骨——調査の中間報告——』浦添市教育委員会，pp.1-17，沖縄。
- 池谷望子・内田晶子・高瀬恭子編訳 2005『朝鮮王朝実録 琉球史料集成 訳注篇』榕樹書林，沖縄。
- 伊波普猷 1927「をなり神の島」『伊波普猷選集』所収，沖縄タイムス社，1961，pp.298-471，沖縄。
- 伊従 勉 2007「新発見の『首里城古絵図』の測量法について」『民族藝術 VOL.23』民族藝術学会篇，pp.37-47，大阪。
- 浦添市教育委員会 2001『浦添ようどれⅠ石積遺構編』沖縄。
- ◇ 2005a『浦添ようどれⅡ瓦溜り遺構編——史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査報告——』沖縄。
 - ◇ 2005b『浦添ようどれの石厨子と遺骨——調査の中間報告——』沖縄。
 - ◇ 2007a『浦添ようどれⅢ金属工房跡編』沖縄。
 - ◇ 2007b『史跡浦添城跡第Ⅰ期（浦添ようどれ）整備事業報告書』沖縄。
- 大林太良・谷川憲一・森浩一編 1983『シンポジウム 沖縄の古代文化』小学館，東京。
- 沖縄県教育委員会 2000『沖縄の文化財Ⅱ史跡・名勝編』沖縄。
- 沖縄県地域史協議会編 1989『シンポジウム南島の墓——おきなわの葬制・墓制——』沖縄出版，沖縄。
- 首里城研究会編 2006『首里城研究』No.9 特集伊是名玉御殿調査報告，沖縄。
- 首里城研究グループ編 1989『首里城入門 その建築と歴史』おきなわ文庫47，ひるぎ社，沖縄。
- 重要文化財玉陵復原修理委員会 1977『重要文化財玉陵復原修理工事報告書』東京。
- 高良倉吉 1989a『琉球王国史の課題』ひるぎ社，沖縄。
- ◇ 1989b「歴史としての墓」『シンポジウム南島の墓——おきなわの葬制・墓制——』沖縄県地域史協議会編，沖縄出版，pp.40-45，沖縄。

- ク 2006「伊是名玉御殿の被葬者についての検討」『首里城研究』No.9 特集伊是名玉御殿調査報告, pp.206-236, 沖縄。
- 田辺 泰 1972『琉球建築』座右宝刊行会, 東京。
- 知名定寛 1994『沖縄宗教史の研究』榕樹書林, 沖縄。
- ク 2005「浦添ようどれの石厨子と仏像彫刻」『浦添ようどれの石厨子と遺骨——調査の中間報告——』浦添市教育委員会, pp.28-51, 沖縄。
- ク 2008『琉球仏教史の研究』琉球弧叢書, 榕樹書林, 沖縄。
- 中本正智 1990『日本列島言語史の研究』大修館書店, 東京。
- 東恩納寛惇 1950『南島風土記』沖縄郷土文化研究会・南島文化資料研究室, 沖縄。
- 比嘉 実 1991『古琉球の思想』沖縄タイムス選書15, 沖縄タイムス社, 沖縄。
- 平山良明 1987「太陽穴について」『おもろさうし精華抄』おもろ研究会編, ひるぎ社, pp.150-157, 沖縄。
- 福島 清 2006「伊是名玉御殿の建築調査報告」『首里城研究』No.9 特集伊是名玉御殿調査報告, 沖縄。
- 平敷令治 1995『沖縄の祖先祭祀』第一書房, 東京。
- 外間守善 2006「琉球王朝の成立と初期王権」『古代王権の誕生 I 東アジア編』角田文衛・上田正昭監修, 角川書店, pp.122-142, 東京。
- 横山重編 1972『琉球史料叢書』第2巻, 東京美術, 東京。
- 琉球政府文化財保護委員会 1956『文化財要覧一九五六年版』沖縄。

한국어 초록

류큐 왕국시대 능묘제
— 류큐왕릉의 구조적 특성과 사상 —

아사토 스스무

류큐왕국 (中山) 에서는 13~19세기에 걸친 600여년에 네 가지 왕통이 교체되었다. 14~15세기에는 오키나와 (沖繩) 섬의 북쪽과 남쪽에 山北·山南이라는 小王國도 존재하였다. 현재 이 왕통들과 관련된 왕릉이 7기 남아 있다. 본고는 초기 중산왕릉·우라소에 요우도레 (浦添ようどれ, 1273년 조영, 15세기 초기 개수, 1620년 개수) 의 발굴조사 성과와 슈리 다마우둔 (首里 玉御殿=玉陵, 1501년 조영) 의 조사보고서에 대한 분석을 중심으로, 류큐왕릉의 변천·구조적 특성·사상적 배경·국제관계 등에 대해 검토하였다. 내용은 ①류큐의 왕통과 왕릉, ②우라소에 요우도레의 변천, ③ ‘보여주는 왕릉’ 으로부터 ‘돌리싸는 (보여주지 않는) 왕릉’ 으로, ④왕릉이 구스쿠 궁전 (首里城 正殿) 을 모델로 삼았다는 점, ⑤왕릉은 니라이·카나이의 왕궁이라는 점, ⑥류큐왕릉의 성립과 동아시아의 관계 등이다.

